「深い見通し」で「女へん」の愛を語る人
中桐美和子第三エッセイ集『そして、愛』に寄せて　鈴木比佐雄

1

中桐美和子さんのエッセイは、心にぬくもりを感じさせてくれる言葉だけで綴られている。中桐さんは一日を一生懸命に生きる人びとに潜んでいる美徳を発見し、その固有の姿に溢れるような感動を語ってしまう人だ。汲み上げられた感動の底には、共にこの世に存在する無条件な人間への愛が貫かれている。中桐さんのエッセイや詩には、そんな人びとを慈しむ心温かいリズムの音色が聞き取れる。きっと中桐さんの言葉の源泉には、生きとし生けるものへの分け隔てのない多様な愛が存在しているのだろう。

中桐さんは同じ教員だが、実家が農家である夫に嫁いだ。そして長年教員生活も続けて大家族の家事や子育て、教職を両立させてきた。多忙な中でエッセイや詩を書く時間や環境を作り出し、七冊の詩集と二冊のエッセイ集や数多くの合同詩画集などを出版してきた。それらの本には、自らの表現活動が持てる喜びが行間から垣間見ることが出来る。それゆえに限られた時間の中で、関わりを持った人びとの魅力をいかに引き出せるか、心の中で対話し熟成させてきたに違いない。中桐さんのエッセイに書かれた人たちへの愛は、父母愛、親子愛、兄弟姉妹愛、祖父母愛、夫婦愛などの家族愛から始まり、師弟愛、同僚愛、友愛、郷土愛、人類愛、生命愛など無限の広がりを感じさせてくれる。その意味でこのエッセイ集は、愛を語ることに不得手な日本人に対して、率直に愛を語ることの清々しさを示している。そんな中桐さんが書いた詩の中で自分の生きる時間をどのように活用しているかを示した「ワ・タ・シ」という詩があるので、引用してみる。

ワ・タ・シ

日曜日のわたしは看護師　生身の混沌をかかえている
月曜日のわたしは尼　爆睡の読経のろうそくの火をともす
火曜日のわたしは解体屋　詩のようなもの
ショパンのCD　本　コーヒーブレイク
バラバラにすることの快感

水曜日のわたしは篤農家　タネマキがすきで
穴だらけのキャベツをつくり
曲がったきゅうりをつくり　草に沈む
木曜日のわたしは世帯主　レシピを積んで
終日　満腹の食卓をつくる
金曜日のわたしは花つくりびと　枯れないクリーピアを作り
アメリカンドリームを育てている
土曜日のわたしは自由人　ドロンと消えたいのに
旅の白ぎぬの衿をつかんでいるのは　どこのどなたか

女偏を貫いた春夏秋冬
輪切りにした充実の時間帯
涯が見える　涙が見える　微笑が見える
海が鳴る　山が動く　風が光る　風鈴が舞う
にんげんが光る　あふれる

終わりの一行をどう書くか

もう一度　女にうまれたい

この詩は二〇〇五年に刊行された詩集『燦・さんと』に収録されていたもので、そんなに古い詩ではない。中桐さんの自らの時間を豊かに生きていることがよく分かる詩だ。極言すれば生きるとは、時間をどう活用するかの問題であり、中桐さんは自分の時間を細かく分けて私に楔を打って「ワ・タ・シ」を多層化して、多様な試みを実践してきたように思われる。それゆえに主婦、教師、介護者、詩人、エッセイストなどの多様な顔を生きられているのだろう。

2

中桐さんは、一九三一年に岡山で生れ、高校三年生の時に永瀬清子の講演を聞き、詩に関心を持ったという。岡山大学教育学部に入学し大学二年の時に井奥行彦氏、坪井宗康氏、三沢浩二氏が創刊した「火片」や岡大生の創刊した「準平原」に参加し詩作を開始し

たが、二誌との関わりは長く続かなかったという。親しい友人には、卒業後に二人で合同詩集『蒼の楕円』を刊行した、くにさだきみ氏がいた。先輩には井奥行彦氏、坪井宗康氏、三沢浩二氏、後輩にはなんば・みちこ氏がいて、後に戦後の岡山の詩運動を担っていく才能溢れる若き詩人たちとの出会いがあった。一九五二年頃に永瀬清子氏、坂本明子氏、くにさだきみ氏、なんば・みちこ氏達と一緒に、中桐さんは戦後で初めての女性詩誌と言われた「黄薔薇」の同人となった。方向性の違いから「黄薔薇」を辞めた後には三沢浩二氏、くにさだきみ氏、沖長ルミ子氏達と「裸足」の創刊にも関わった。その後、十数年間、筆を折った時期もあったが、一九七七年に「火片」にまた復帰して現在も書き続けている。定年退職後には、姑や実母の介護を引き受けながらも詩やエッセイを書き続けてきた。さらに特筆すべきことは、二〇〇二年に元山陽新聞解説委員だった柳生尚志氏や画家の武内寛氏達と一緒に岡山県エッセイストクラブを設立して、岡山にエッセイを書くことの土壌を広げようとしてきたことだ。もちろん自分もエッセイを書き続けて今回で三冊目のエッセイ集が刊行されることになった。中桐さんの詩集を通読してみて第三詩集『私のブルースカイ』の解説を書いた永瀬清子氏が中桐さんについて次のように語っている箇所に気づいた。

「家庭についての甘やかな視線と、詩についてのきびしい見きわめがある一方で、私を更に驚かしたのは「女へん」の字についての深い見通しであり、これらの数頁は、世の多くの評論にまさって私たちの心をえぐる何かでありました。（略）それは新しい発見でもあり、また、それは女性的な抒情から、一歩より高く物事を理解する道でもあり、また、彼女が本当の詩人としての哲学的な素質を持っている人なのだと気づいた次第でもあります。」

この解説は永瀬清子氏が亡くなる前年の一九九四年春に書かれたものだ。永瀬氏は中桐さんの家族愛の中に潜む鋭い批評性に驚いている。その批評性を「深い見通し」という言葉で指摘していた。さらに「本当の詩人としての哲学的な素質を持っている」とも語っている。その意味で永瀬氏は中桐さんの最も良き理解者であり、中桐さんの本質的な特長を洞察していたのだと思われる。その批評性である「深い見通し」が、中桐さんにエッセイを書かせてきた原動力であるように私には感じられた。

3

今回の『そして、愛』は、六章五十四編のエッセイが収録されている。一章「黄昏の伴走」八編には、高齢化社会の現実的な問題を直視して、いかに具体的に高齢者と時間を共有していったらいいかを考えて実践していくかといった内容だ。冒頭の「一つのプラン」では、尊敬していたO先生のボケの初期症状をきっかけに、近くに「託老所」を作り、「仲間たちと至福の時を過ごしたい」と構想する。「二度童子（わらし）」では、百歳を超えた姑を抱えて夜中に一睡も出来ない時に「神様、助けて！」と言いたくなる心境や、時には施設に預けて一泊旅行を楽しみ、「わが愛は、台風のごとく君に向かえり」などの詩を思い出し、介護をする元気を取り戻すという。「命――つなぐ」では、一〇五歳の姑の介護をしながら「バアちゃんは、宝もの」と命の炎を励ましている。「黄昏の伴走」では、周りにいる伴侶を失ったりして家族とも離れている「おひとりさま」の高齢者達をつなげることが出来ないかという問題提起をしている。「凡がよかろう」では、「明日がないかもしれない」母を引き取って明日を創り出していく中桐さんの生き生きした姿が描かれている。その他の三編も中桐さんは日々を豊かに過ごすために「五目ならべ」をしたり、池坊宗匠に次ぐ

華老に活け花を習ったり、元大学教授から『源氏物語』の原文を個人指導される学ぶ楽しさを書き記している。

二章「明日がある」九編は、家族や若い頃に交友のあった人びととの食や好きなものにまつわる思い出の中から、中桐さんを形作ってきたエピソードを記したものだ。冒頭の「剣山の梅酒」では、教職についた頃に剣山山頂の山小屋で体調を崩して死にかけたが、一杯の梅酒が回復のきっかけになった話だ。多くの人のおかげで自分が生かされていることに気づかせてくれる。「鯛やき」、「さつまいも」、「帽子」、「花」、「くだもの」、「朝ごはん」、「ティータイム」、「天窓」、「演劇」などに込められたかつての時間を豊かに反復している。

三章「風　光る」八編は、中桐さんの敬意を抱く生き方をした人物を紹介したり、独自の男性観を語ったり、また憧れていた場所を訪れた紀行文などだ。冒頭の「ああ　贖罪」では、夫の同僚であり、泰緬鉄道建設元捕虜慰霊のための平和寺院をタイのクワイ河畔に建て、全財産をタイの学生達に奨学金として与え続けた永瀬隆さんについてその偉業を書き記した。このエッセイ集で最後の原稿はこの作品だった。「男性の品格　あ・い・う・え・お」は、様々な男達を見てきた中桐さんが、愛すべき男たちの美徳について敬意を

持って語りながらも、どこか面白がって観察しているところに批評性を感じた。「北京慕情」と「風　光る」は、中桐さんが憧れていた万里の長城への紀行文だ。日本列島の長さに匹敵する万里の長城に上り、全ての我を忘れて、数千年の歴史を感じ、「今は、幸せの中にいる」と呟く中桐さんの生き方から語られる言葉に、私もその場にいるような思いがして感動が伝わってきた。その他にもいくつもの旅の感動を中桐さんは手触りのある言葉で伝えてくれている。

四章「みんな　キラリ！」十一編は、山陽新聞に掲載されたエッセイで、岡山を愛する思いや提言が折りに触れた風物や時事的な問題に寄せて語られている。五章「創作の励みに」八編は、中桐さんに刺激を与えた書物や講演や展覧会などを紹介したり、また詩やエッセイを広めるために設立された「中四国詩人会」や「岡山県エッセイストクラブ」の経緯を記してくれている。また「過ぎ去ればすべて美し」は、中桐さんの備忘録ではあるが、岡山県の詩とエッセイの活動記録とも重なっている。六章「傘をさしてくれた人」十編は、書評と追悼文だ。最後の「傘をさしてくれた人」は、永瀬清子氏と子供達の長所を見るようにと助言された先輩教師のO先生の二人について語っている。一九五三年に永瀬氏、なんば・みちこ氏と三人で行ったハンセン病患者のいる長島愛生園への一泊旅行について、中桐さんは生涯の最も重要なことと考えていることが分かる。最も悲しみを秘めて生きている人びとのことを中桐さんは、ハンセン病患者に詩の指導をしていた永瀬氏の背中を通して学んだのだろう。

中桐さんのエッセイは、岡山の文化・教育・創作活動の多様性を認める豊穣さを示している。また人びとが未来に希望を持って今を生きるために、「深い見通し」を探求し、しなやかな「女へん」の愛が率直に語られている。そんな中桐さんの愛に満ちたエッセイを多くの人たちに読んで欲しいと願っている。